



震災10年 取り組み紹介

弘大リレーシンポジウム開始

東日本大震災から10年を前に、弘前大学 断片的に振り返ることで震災について考える

のこれまでの取り組みを横断的に振り返ることで震災について考える
リレーシンポジウムの初回が26日、弘前市の土手町コミュニティパークで開かれた。5月まで全7回にわたりに行われる。

弘前大学の取り組みを通じ、東日本大震災を振り返ったシンポジウム

シンポジウムは、同大学の学部・研究科・研究所がそれぞれ震災関係の研究活動などで培ってきた「知」を地域社会に向け発信することを目的に開催。対象は市民や自治体の防災担当者の

ほか、同大への進学を考えている高校生など。講演の様子はFMアップルウェブの動画サイト「アップルストリーム」でオンライン配信された。

初回は「地震の科学・社会基盤施設の被害と対応」をテーマに、理工学研究科准教授の前田拓人氏と上原子晶久氏、農学生命科学部教授の森洋氏が講演した。

このうち、前田氏は震災を引き起こした東北地方太平洋沖地震について、データを例示しながら「日本列島の形を変えてしまっただけで、大きなものだった」と紹介。

震災を契機に、小さな津波でも高精度で感知できる海底圧力計が整備されるなど、海底観測網が劇的に強化されたことに触れ「日本周辺に桁違いの観測網が敷かれている。防災の面では陸に津波が到達する前に感知できる側面もある」と強調した。

次回は2月18日、「医療対応」をテーマに開催する。
(田中康貴)

※この画像は当該ページに限って
陸奥新報社が利用を許諾したものです。
[問合せ先]弘前大学理工学研究科
E-mail:r_koho@hirosaki-u.ac.jp